

新聞と友だちになろう PART 2

PART 1で紹介した授業を受けた子どもたちが、6年生に向けての春休みに次のような通信社からの記事がいくつかの新聞に載っていました。

第二次世界大戦中、ソ連（ロシアの前の国）のシベリア地方、チュメニの軍用地下倉庫で爆発が起き、閉じ込められた管理人夫妻が産んだ4姉妹が、このほど無事発見されるまで、45年間も太陽のさしこまない地下室で暮らしていたというものです。かんづめなどはあったとされていました。この記事は、ソ連の週刊紙が報じたものを日本の共同通信が伝えたものです。いくつかの新聞、テレビや週刊誌でも報道していました。

ところが、8日後には「『45年ぶり4姉妹救出』はウソ ソ連紙『エープリルフル用』と」（「読売新聞」90. 4. 6朝刊）、「地下倉庫から45年ぶり生還の4姉妹『奇跡の救出』作り話だった」（「毎日新聞」90. 4. 6朝刊）というような記事がいくつかの新聞に掲載されました。

記事を書いたチュメニ市の週刊紙「協同組合新聞」の担当者は、「市民は新聞の記事を信じてうのみにするので、批判精神をもってもらうため、エープリフル用のじょうだんとして記事を掲載した」とし、この記事が世界中に流したモスクワ放送担当者も「つくり話とはわかっていたが、そのまま放送した」としています。そして、イギリス放送協会（BBC）も報道したことから、日本の報道機関もだまされたようです。

6年生になった子どもたちと早速取り組んだのがこのテーマです。

報道された記事を読んで、疑問をだす

【生きることができた条件について】

〈衣について〉

- ① 生まれた四姉妹の衣服はどうしたか（生まれてからずっとはだか？）。

〈食について〉

- ① かんづめはあったが、かんきりはないのでどうやって開けたのだろうか。
- ② 野菜やミルクはくさるだろう。
- ③ 肉・砂糖・チョコレートなどでは、栄養失調になってしまう。
- ④ 倉庫の中だから水はない。

〈住について〉

- ① 光が入らないところなので、酸素が足りるのか。
- ② 灯油にどうやって火を付けたか。
- ③ 灯油をどうやって燃やしたのか。
- ④ もし、灯油が燃やせても、酸素が不足してしまう。
- ⑤ トイレはどうしていたのか。
- ⑥ おふろがないので、衛生の面からおかしい。
- ⑦ シベリアの寒さにたえられたのか。

⑧ 夏暑さにたえられたのか。

〈子供の成長について〉

- ① 出産の時、タオル・水がないのにどうしたのだろうか。
- ② 髪の毛やつめはのびほうだいかな。
- ③ 虫歯になってしまう。
- ④ 日光不足による病気にならなかったのか。

〈その他〉

- ① 死体と暮らしていたのか。
- ② なぜ自分が45才と分かるのか（時計があっても、日にちを書きとめるものやカレンダーがない）
- ③ なぜ親が死んだ年代が分かるのか。

【報道の記述について】

- ① 発見者の名前が出ていない。
- ② 発見者のコメントがない。
- ③ 記事に写真がない。
- ④ 大ニュースなのにどうしてもっと大きくのらないのか。
- ⑤ 病院名が書かれていない。

新聞社にアンケートをとる

以下のようなアンケートを作成し、全国紙、ブロック紙、地方紙、24社に依頼しました。

こんにちは。私たちは社会科の授業でマスコミについて学習しています。この間「ソ連のチュメニの軍用地下倉庫から45年ぶりに4姉妹が救出された」という記事があり、数日後にウソだったという事件がありました。私たちはその事件について、いろいろとおかしいところを考えてみましたが、その報道について全国の新聞社にご意見をうかがおうと、アンケートをつくりました。どうかよろしく願いいたします。

1. この記事をのせましたか。

【のせた場合】

2. どのような理由でのせたのですか。
3. どのくらいのスペースでのせたのですか（できましたら記事のコピーをお送りください）
4. このニュースで疑問に思ったことはありませんでしたか。
5. 共同通信に確かめましたか。
6. モスクワ放送に確かめましたか。
7. モスクワ放送の担当者は「日本人はまじめで人を疑わないとは聞いていたが、真実を見分ける直感力はあると思っていた……」と話していたそうですが、この

ことについてどう思いますか。

8. 「訂正」の記事をのせましたか（のせた場合、そのコピーをお送りください）。
9. 「エイプリルフール用」といいますが、そのようなニュースについてどう思いますか。
10. このようなニュースをのせた場合は「誤報」と考えてよいのですか。
11. このニュースに対する読者からの意見はありましたか。

【のせなかった場合】

2. どのような理由でのせなかったのですか。
3. 「ウソ」だと確信してのせなかったのなら、どの部分でそう思いましたか。
4. 共同通信に確かめましたか。
5. モスクワ放送に確かめましたか。
6. モスクワ放送の担当者は「日本人はまじめで人を疑わないとは聞いていたが、真実を見分ける直感力はあると思っていた……」と話していたそうですが、このことについてどう思いますか。
7. 「エイプリルフール用」といいますが、そのようなニュースについてどう思いますか。
8. このようなニュースをのせた場合「誤報」と考えてよいのですか。
9. このニュースに対する読者からの意見はありましたか。

ご協力ありがとうございました。

新聞社からの回答

【掲載した新聞社の回答】

《産経新聞》

- ① 掲載しました。産経新聞には3月29日（木）の夕刊に、サンケイスポーツには30日に掲載しました。（別紙コピー） 産経新聞社は産経新聞、サンケイスポーツ、夕刊フジの三種類の新聞を発行しています。なおサンケイスポーツには夕刊はありません。
- ② もし、事実であるとすれば非常に興味深いことであると判断したからです。新聞界の経験からして、「完全に否定できないニュースは掲載する」というのが原則だからです。すなわち、社会で起きることは常識破りのことが多く、常識だけで判断することの方がいかに危険であるかということを知っているからです。もちろん報道したことによって被害を受ける人がいる場合は、掲載を見送ることが原則です。
- ④ 疑問があると思いました。それは30日付サンケイスポーツを参照して頂ければおわかりになると思います。ただ、産経新聞の紙面上では疑問点を強調してお

りません。これは、この記事がたとえ誤報であっても実害がないと判断したからです。

- ⑤ 確かめませんでした。共同通信とは信頼関係にあり、共同通信は記事を捏造（ねつぞう）しないと信じているからです。（モスクワ放送が伝えたことは事実であり、真偽に関する責任はモスクワ放送にあって、もし誤報をモスクワ放送が意識的に流したとするのならば、将来において信用されないという責めを負うことになるでしょう。つまりモスクワ放送は「正確なニュースを流す」というマスコミ界のルールを破ったわけです。今後は産経新聞はモスクワ放送をすぐには信用しないという立場をとり続けるでしょう。）
- ⑥ 確かめません。独自取材が原則だからです。ただ、ソ連社会は西側社会と違ってオープンではないために独自取材はむずかしく、今回については取材をしていません。もし、同じようなニュースが西側社会で流された場合は、真偽をめぐって取材合戦が繰り広げられたでしょう。
- ⑦ 公共の放送を使ってニセ情報（エイプリルフールを含めて）を流すほうがおかしいのではないのでしょうか？ ただし、短時間後に否定すれば別ですが…。産経新聞はモスクワ放送に敬意を払っていたので、疑問を抱きながらも報道したのです。
- ⑧ 掲載しました。産経新聞は4月6日の朝刊、サンケイスポーツも4月6日付です。同封のコピーをご参照下さい。
- ⑨ あまり良いものとは思われません。
- ⑩ 誤報といわれても仕方がないでしょう。
- ⑪ ありませんでした。ただ、訂正が掲載されたあとに「いつ第1報は掲載されたか？」という問い合わせが数件ありました。

産経新聞社 読者サービス室

《毎日新聞》

拝復（はいふく）

お手紙たしかに受け取りました。お答えのできるところを書いてみましょう。記事のコピーを入れておきましたので、これを参考にして下さい。

この記事をのせたのは、なぜかという質問ですが、みなさんはこの記事を読んでどういうふうに思いましたか。きっと「こんなことってあるのだろうか」と思った人が多いのではないのでしょうか。新聞社でも同じです。おどろきを伝えることも新聞社の仕事の一つです。

新聞は「もっと早く」「もっと正確に」という目標をかかげて毎日努力しております。この両方がいつも同時に得られれば一番いいのですがなかなかそうはいきません。それでこの場合は、モスクワ放送という世界に知られた放送局が放送し、これを聞いたヨーロッパの放送局がさらに放送したという事実を重くみました。つまり「放送した」という事実をただちに日本の読者にも伝え「驚き」をともにしよう

と考えたのです。

もちろん、共同通信から送られてきた記事を読んで「おかしいな」と疑問を感じたところもありました。一番大きな疑問は、本当に四十五年間もそういう生活が可能だったのだろうか、ということです。それで見出しのなかに「45年？」と「？」印をつけました。この時点では、世界に知られた放送局が放送したことです。全部作り話だなどとは思いません。でも、日本で生活している人たちの常識からいうと「？」と思えるところがあるという感じでしょう。それで、いずれ、もう少し時間がたってくわしいことが分かれば、その時に改めてくわしい記事がくるだろうからその時に疑問もとけるだろう、と考えました。

これを、新聞社では、一報（いっぽう）、続報（ぞくほう）というふうに言っております。最初にまず驚きをそのまま伝えてきたのが一報、その後くわしく分かった後できた記事を続報というわけです。つまり、続報では、たとえば「倉庫といってもただの倉庫ではなく、はじめから世間にかくれて仕事もできるようにつくられていた」とか「最初の記事では〇〇と書いていたところが本当は□□というほうが正確だった」というふうになります。

外国での仕事は、日本で考えているようにはいかないことがたくさんあります。それで外国から届く記事の場合は時々こういうことがあり、二つ三つと続報が届いてようやく納得がいくということもあるのです。

それで、こういう時の一報をどういうふうに新聞にのせるか、日本の新聞社ではいろいろ考えます。今回は、とりあえず、放送の内容だけをあっさり伝えようということでごらんになったていどの大きさの記事にとどめたのです。

共同通信に確かめましたか、という質問ですが、それはどういう意味でしょう。もし、最初から疑えという意味でしたらそういうことはしません。ちょっとむずかしい言葉を使いますが、共同通信社と各新聞社は配信・受信契約というのを結んでおります。これは相互に信頼し合って契約しているものですから、たとえば「1 + 1 = 3」というふうに誰の目にも間違いと分かるようなものが書かれていれば別ですが、そうでなければ、何でも疑うということはありません。共同通信の仕事がいつもいつも疑わなければならないようなものなら最初から契約しないわけです。モスクワ放送の担当者の言い分はずい分と人を食った言葉ですね。うそを白状した後のてれかくしかもかもしれません。

訂正の記事をのせましたか、との質問ですが、6日朝刊の記事をどういうふうに読んでくれましたか。また、先に書きました、一報、続報の話で理解していただけますか。読者のみなさんには十分に理解してもらえていると思っております。「こんな記事をのせてけしからん」という意見は届いておりません。日本の新聞社が作り話を知っているのせたのならたかさんの人たちが抗議してきたと思いますが。

エイプリルフールというのは、上手にかついでおいて上手にたねをあかして、みんなでわっと笑って、お互いに楽しみ、より親しくなれるという遊びではないでしょうか。すくなくとも、日本の新聞は、エイプリルフールをそういうふうと考えております。モスクワ放送のようなことはしません。

ただこの記事によって誰かが損をしたり、不幸になったりという実害（じつがい）

はなかったようです。その意味では罪のない話、つまりエイプリルフールと考えたのかも知れません。

いずれにしても、うっかりというか、すっかりというか、みごとにだまされてしまったわけです。そのことを誤報といわれるならば、新聞社として反省しなければなりません。新聞をつくっている立場からいうと、ひとこともふたこともあります。仕方ありません。質問についてのお答えは以上のとおりです。これでよろしいでしょうか。よく理解してくれればうれしく思います。

毎日新聞社 読者室

《北海道新聞》

* 「45年ぶりに地下倉庫から姉妹救出」の記事についてお答えします。

- ① 北海道新聞は、その記事を掲載しました。当日、紙面を担当したデスクによると、記事を見て、まず「びっくり」したそうです。と同時に「本当にあり得ることだろうか」という疑いも抱いたといえます。
- ②④ ニュースとは何か—難しい問題になりますが、あることを見たり聞いたりしたときに感じる「珍しさ＝意外性」や「驚き」「面白さ」もニュースの一つの要素です。

「地下の4姉妹」は、この条件に合っています。しかし、〈証拠〉になると、あいまいです。記事には「モスクワ放送が伝えた」とあるだけで、TVで姉妹の姿が放映された様子はなく、写真の配信もありませんでした。
- ③ そこで、この記事は「話題もの」として処理することになりました。「こんな話があるそう」という扱いで、レイアウトもそれにふさわしいものになります。通常の事件、事故の場合は目撃者もいるし、関連談話や現場の写真もありますから、見出しのとりかた、組みかたはガラリと変わります。同封のコピーA（90年3月29日朝刊第1社会面）が、第一報の扱いです。
- ⑤⑥ この時、共同通信にもモスクワ放送にも確認はしていません。通常、通信社が配信した記事に対する確認、問い合わせは、こちらの手元にあるデータや、自社の取材内容と異なるとき、あるいは、外電で明らかに翻訳ミスではないかと思われる場合などです。「4人姉妹」の記事は「地元紙の報道」を「モスクワ放送」が紹介、それを「ロンドンの共同通信」が取材して配信した—というもので、確認は事実上不可能といえます。
- ⑦ 「日本人はまじめで…」のくだりですが、私個人はニヤリとただけです。「一杯くわせておいて、よく言ってくれるよ」—そんな感じですが、見出しで「涼しい顔でソ連紙」とうたった整理者の気持ちは、よく分かります。
- ⑧ 「実はウソだった」という記事を扱ったのが、コピーBです。大きさは第一報とほぼ同じになっています。見事にかつがれたわけですが、紙面でも、きちんと始末をつけなければなりません。
- ⑨ エープリルフール用のニュースに関しては、それが人権にかかわるものとか、政治・社会的混乱に結びつくなど「ウソ」の影響が重大なものは避けるべきです。

ウィットやユーモアに満ちたものなら、あってもいいのではないのでしょうか。英国の各紙は4月1日付の新聞で、この「ストーリー」を競い、読者もそれを楽しみにしているそうです。「これはすごい」と思わせるほど、まことしやかに書かれているが、さりげなく「新聞の日付をよくご覧ください」と入れてあるとか。日本の新聞は、ここまですることはいし、例えやろうとしてもできないでしょう。

- ⑩ 「4人姉妹」は、誤報とはちょっと違うと思います。ある事件の容疑者でもないのに、記者が誤った断定を下して報道したとか、架空の記者会見、合成写真を本物と偽る一などを私たちは誤報と呼んでいます。「4人姉妹」ははじめから〈遊び〉のつもりで「エープリル・ストーリー」を狙ったものです。
- ⑪ 「4人姉妹」の二つの記事について、読者から「ふざけている」「掲載すべきでない」「面白かった」などの反響は、ありませんでした。

北海道新聞社 編集局整理部

《西日本新聞》

拝復

先日、モスクワ放送の報道を伝えた共同通信モスクワ支局の記事についてのお問い合わせを頂きました件について、西日本新聞社編集局整理部としてのお答えをいたします。第一報を掲載した他紙の西部地区版も同封いたします。何かのご参考にさせていただければ幸いです。

マスコミについての熱心な取り組み、関心いたしております。マスコミに対する批判が強まっているのは事実です。心を引き締め、「真実の報道」を目指し、がんばっていきたくと部員一同考えております。

- ① 掲載しました。ただし、朝刊の外信面最終版のみ。翌日の夕刊と朝刊では、マユツバではとの意見が強まり、掲載見送り。
- ② この記事は3月29日午前1時過ぎに共同通信から配信されました。こんなことがあり得るのだろうかとしきり議論がありました。強い疑問を指摘する声と、反面、広いソ連のこと、あり得るのかなという意見も。半信半疑の中で、「ヘーッ」と思わせる記事はやはりニュースであるとの判断で掲載しました。
- ③ 別紙コピー参照。
- ④ 2に記したように、記事にあるような環境で人間が長期にしかも家族を形成して物理的に精神的に生活できるのだろうかとの強い疑問があり、見出しには「？」をつけた。
- ⑤⑥ いいえ。仮に共同通信に問い合わせても、信用できる、できないの回答が果たしてできたか…。
- ⑦ 続報記事で、モスクワ放送は事実無根の虚報であることを承知のうえでエープリルフル用として流したと涼しい顔のようです。さらに「日本人は人を疑わないが真実を見分ける力はあると思った」とコメントまでつけていますが、公共の

電波を使って、たとえジョークにせよ虚報の報道を真実かのごとく、タレ流すことは、日本のマスコミでは考えられないことです。

- ⑧ 第二報を訂正記事の意味で載せました。(別紙コピー) 一報は朝刊最終版のみでしたがソ連のマスコミは、こんな考え方をもっているのかという驚きもあり、二報は朝刊全版に掲載。
- ⑨ 7の回答参照。
- ⑩ 結果的に読者に対しては誤報だったといえるが、事実関係の誤りではなく、モスクワ放送の意図的な虚報である点が、これまでになかったケースといえる。大上段にふりかぶる訳ではないが、日本のマスコミは真実の報道を基本としており、その公共性を強く自覚している。西日本新聞の場合も「真実の報道」を編集綱領の第一項目に掲げている。朝日の「サンゴ事件」で社長辞任に追い込まれたのも、読者の厳しい目と、マスコミとして率直な反省の姿勢といえる。
お国柄の違いといってしまうとそれまでだが、表現の自由、報道の自由が重視される国のマスコミでは考えられないケースだ。

西日本新聞社 編集局整理第二部

《神戸新聞》

こんにちは。みなさんからの質問にていねいに答えるようにと、読者センターから紙面をつくった整理部にまわってきました。

アンケートはどれも答えるのがむずかしいものばかりでした。新聞に高い関心を持っているみなさんが考えるヒントになるように、一生懸命に答えました。

みなさんが注目された今回のケースは報道人にとっても大切な問題です。信頼される新聞、楽しい紙面へこれからも努力していきます。

新聞への質問がありましたらこれからも遠慮なくお手紙ください。

- ① のせました。(コピーをつけています)
- ② ニュースであると思いました。
- ③ 比較的目立つあつかいにしました。(コピーを見てください)
- ④ たくさんありました。水は？トイレは？子育てができるか？太陽なしで生きられるか？など……
- ⑤ 確かめていません。
- ⑥ いいえ
- ⑦ 東欧に改革の嵐がふきあれ東欧地域のニュースに注意を払っている中、グラスノチ(情報公開)の成果をよそおい、誤った情報を流すことは信頼性をきずつけることになるでしょう。
- ⑧ のせました。(コピーあり)
- ⑨ 外国ではあるようです。ウィットを理解する、大切にすることが、みんなに認められればいいかも知れません。日本ではどうでしょうか。軽い冗談はゆるされてもいきすぎると困るでしょう。
- ⑩ 読者に誤った情報を伝えたということから誤報になるでしょう。エイプリルフ

ールだったとわかって、すぐに訂正の続報をのせましたが、いかがでしょうか。
質問5、6にあるように情報源に確かめるのが大原則です。

⑪ とくにありません。

神戸新聞社 編集局整理部

《熊本日日新聞》

シベリアの四人姉妹救出報道に関するアンケートのお答え

- ① 3月30日の朝刊外電面に掲載しました。
- ② ニュース性、話題性ともあるニュースと考えたので
- ③ 切り抜きを参照してください。掲載の大きさは、四段相当の横組みで、横組みは話題性の強いニュースの時に行ないます。
- ④ ほんとなかな、でもソビエトならあるんだろうなという感じを持ちました。3月30日の夕刊の寸評コラム（別紙参照）に書いたとおりです。
- ⑤ 共同通信に問い合わせることはしばしばありますが、この時は問い合わせはしていません。
- ⑥ 共同のクレジットがついたものについては原則としてそのソースまでは問い合わせしません。共同通信を信頼しているということです。
- ⑦ 個々の記事がウソかホントかを直感で見分けることはむずかしいと思います。このニュースの場合、ソ連の新聞がエイプリルフール前後に、こうしたジョークを飛ばすという習慣があるのを知らなかった不明を恥じています。
- ⑧ 共同通信が配信した訂正記事を掲載しました。（別紙参照）
- ⑨ そういうものがあることは別に構わないと思います。掲載の仕方さえキチンとしていれば。健全なユーモアはストレスの多い現代社会には必要です。
- ⑩ 誤報の一つと考えます。ただ、被害者のない（読者全員が被害者とも言えますが）誤報ということで、一般の誤報とは少し違うように思います。
- ⑪ やっぱりあれはウソだったのですね、という電話が一件ありました。

熊本日日新聞 編集局

【のせなかった新聞社の回答】

《朝日新聞》

海外ニュースを担当している本社外報部に事情を聞きましたので、お答えします。

- ① 朝日新聞は、この記事を載せませんでした。
- ②③ 45年間も、一度も太陽に当たらずに生存できるとは思えないし、食料や水もそんな長期間あるはずがない。常識的に考えて、この記事はおかしいと思った。また、本当の話なら、当然、本社モスクワ特派員が記事を送ってくるか、連絡し

てくるはずだが、それもなかったので、信憑性（しんぴょうせい）に欠けると判断し、最初から載せようとは考えなかった、とのことでした。

- ④⑤ 前記の理由から、共同通信、モスクワ放送のいずれに対しても確かめていません。
- ⑥ モスクワ放送の担当者の話は、日本人に対する皮肉であると同時に、虚報と知りつつ流した責任に対する言い訳のような気がします（記事が送られてきたのが3月28日ごろだったため、エープリルフール用の記事だとは思いませんでした）。
- ⑦ 日本にはエープリルフール用のニュースを流す習慣はありません。外国の新聞や放送はそのようなことを時々やりますが、あまり感心できません。誰にも迷惑のかからないユーモアにあふれたものなら、ぎりぎり許されるかもしれませんが。
- ⑧ 内容や紙面での扱い方にもよりますが、一般的には、誤報と考えていいでしょう。
- ⑨ 読者から意見や問い合わせは、まったくありませんでした。

マスコミについての学習は、いろいろ複雑な問題がありますので、非常に困難だと思いますが、がんばって下さい。

朝日新聞社 読者広報室

《日本経済新聞》

- ① 載せなかった。
- ② 記事内容にやや信憑性に欠ける部分があった。モスクワ特派員に確認を依頼したが、他の取材で忙しく時間切れになった。確認が取れない以上こうしたセンセーショナルで、荒唐無稽（こうとうむけい）な記事を載せるのは、不相当と判断した。
- ③ 「ウソ」と確信したわけではない。確認が取れなかったからである。
- ④ この記事を配信した共同通信に確かめても、配信した以上「事実でしょう」と答えるに違いないので、この種の物を配信した通信社に確認しても意味がない。
- ⑤ 確かめていない。当社のモスクワ駐在記者がつかまればまずモスクワ放送に確認した筈だが、先のような事情でつかまらなかった。
- ⑥ やや人を馬鹿にしたコメント、と言う気がしないでもない。
- ⑦ 欧米では、エープリルフール用としてこうした荒唐無稽な記事を載せる新聞が、少なからずある。しかし日本では、そうした風土はない。その意味では日本人は生真面目で、ある意味ではジョークを解さない民族性が有るのかもしれない。
- ⑧ 欧米と日本の風土に違いが有るとすれば、日本の新聞にこうしたニュースを載せた場合誤報と言われても仕方がない。
- ⑨ 記事を掲載しなかったため、読者の意見は無い。

日本経済新聞社 国際第1部

《北日本新聞》

- ① 掲載しませんでした。
- ② 記事内容に不自然な点があること、現実的に信じ難い話であること（例えば食べ物をどのようにしていたか、病気にならなかったか）を考え、掲載については保留にしました。2年ほど前、やはりソ連で地震があった時、長い間下敷きになった人達が救出されたとの報道が誤報であった例もあります。またUFOが現れた、との話も最近ありましたが真実性に欠けるもので信用できないと判断していました。興味をそそる「話題」的な話ですがニュースとして取り上げるには不安がありました。
- ③ 「ウソ」と確信したというより当日のデスク（紙面制作の編集整理部門の責任者）が総合的に判断した、ものです。
- ④⑤ 特に確認や問い合わせはしませんでした。
- ⑥ モスクワ放送の担当者自体、正確なものかどうか分からないのではないのでしょうか。その通りとしても「真実を見分ける直感力……」との言い方は弁解に過ぎないように聞こえます。だまされた日本人、報道機関の方が悪かった、とは率直に受け止めることが出来ないと思います。ニュースの発信源（例え遊びの虚報であればなおさらのこと）としての責任は重く感じてほしいものです。ただし、面白いから…、読者が喜びそうだから…などとニュース、話題に飛び付く風潮が日本のマスコミ界全体にあるのは残念です。報道に携わるものの一員として、今回のケースを忘れずに自戒しながら日常の仕事を進めていこうと話合っています。
- ⑦ 身近な個人の周辺、口伝えで広がる範囲で実害の及ばないものは許されると思います。しかし、報道機関が安易に取り上げることは賛成できません。現代はいろんな情報が氾濫（はんらん）している社会です。情報、虚報に振り回されない読者や視聴者になってほしいと思います。（1938年10月30日、ラジオドラマ〈火星人襲来〉の中で宇宙船着陸の〈臨時ニュース〉を放送したところアメリカ中がパニックになったという有名な話があります）
- ⑧ 結果的に「誤報」をけいさいしたことになる、と思います。ウソの話と分かってから掲載誌がどのような措置（紙面で読者に対して）をとったか知りませんが、この場合、訂正の意味を含めて誤った形の記事を載せたことを読者に知らせなければなりません。
- ⑨ 意見、反応はありませんでした。

北日本新聞社 編集局編整本部

《山梨日日新聞》

先日依頼のありました「ソ連の四姉妹」記事についてお答えします。

- ① 記事は載せない。（後になってこの記事がエイプリルフール用のものだという記事は載せた）

- ② 外電であり、他に載せる記事が多かったため載せなかった。
- ④ 一般的に外電の場合、共同通信を信用している。
- ⑥ 「真実を見分ける」こととは違う。むしろこういうニュースを流す方にこそ問題がある。日本の新聞の精神は「事実」立脚だから。
- ⑦ 日本では許されない。読者が新聞を信用しなくなる。
- ⑧ 結果としては「誤報」になる。
- ⑨ なかった。

山梨日日新聞社 編集局

《中国新聞》

前略

お手紙拝見しました。社会科の学習ということですが、大変いいテーマだと思います。質問もとても良いと思います。出来るだけ分かりやすくお答えしたいと思いますが、専門語や難しい表現を使うかもわかりません。先生に説明してもらって下さい。いかがが質問に対するお答えです。

- ① 記事は掲載していません。
- ② 第一は記事を読んで直観的に「ホントかな?」「おかしいな」と思ったからです。第二には、他にものせたい記事（読者に読んで欲しい記事）があったからです。
- ③ 「おかしい」と思ったのは、45年間もの地下室の幽閉生活という、特異な体験のわりには、私たち一般人がビックリするような事実が、なにも述べられていなかったことです。例えば排せつ物はどう始末したのか、言葉や教育は、病気にかかった時は、ふろや散髪は、太陽の光にあたらなかった影響は……などだれもが疑問に思うことについて、ほとんど記事は触れていません。私はこれを「リアリティーがない記事」と言っていますが「本当らしさが感じられない」という意味です。とは言え、この記事が全くのデタラメ、デッチ上げと始めから判断して、掲載しなかったわけではありません。むしろ「事実としたら大変面白いニュースだ。読者の話題になるだろう」と思ったのも事実です。だから、もし当日、記事に対してあまり不審を抱かず、紙面のスペースがあつたら中国新聞も、この記事をのせていたでしょう。
- ④⑤ 共同通信にもモスクワ放送にも問い合わせはしていません。一つには、共同通信の記事を信頼しているからです。もう一つは、これは言い訳になりますが、原稿があまりに大量に殺到して、忙しすぎるため、確認する余裕がなかったためです。もちろん、不審な記事については、納得いくまで確かめる、これが読者のみなさんに情報を提供する私たち編集者の務めであると思っていますが…。
- ⑥ あまり意味のないコメントだと思います。信じやすい日本人もいれば、疑い深い日本人もいる、それは万国共通の「人間的現実」だと思っています。ただし、この種の珍しい話題に日本のマスコミは飛びつきやすい、そしてビックリするほど派手な扱いをする傾向は指摘できるでしょう。

⑦ どの国にしる、個人が自分の責任で、どんな作り話、デマを流そうと自由です。つまり、立派なことではないが、「人がそうしたいことは、阻みようがない」ということです。しかし、モスクワ放送というような、マスメディアの場合は、事情が違うと思います。マスメディアには、情報提供者としての社会的責任があるからです。例え、国境が違っていてもです。いつも、虚報、デマを流している機関なら、聞く者、読む者も自分で疑問を持って臨むことができますが、モスクワ放送の場合、だれがこんな作り話を世界に向けて流すと予想できるでしょうか。この記事を作って流したモスクワ放送の担当者の良識を私は疑います。エイプリルフール用の作り話は他の手段で、他の相手に試みるべきでした。

⑧ 作り話を、本当にあったことのように報道したのですから、誤報です。もし、作り話を作り話とはっきり分かるように報道すれば（そんな方法が可能かどうか分かりませんが）誤報ではありません。人をだますのは嘘ですが、だまされることを知っている人にとっては嘘ではないのと同じです。（少し難しいかな）ただし今回のケースは誤報ではあっても「罪のない誤報」といえるでしょう。誰かがこれによって傷ついた、被害や損失をこうむったというような内容ではないからです。私たちは、内輪の言葉で「人畜無害」と呼んでいます。マスコミが誤報することは、好ましいことではないが、避けられないことだ、と私は思っています。その理由は色々ありますが、どうして誤報は起きるのかを考えてみるのが大切だと思います。ある人が新聞を利用して嘘の情報を掲載させようと思えば、出来るでしょう。人の嘘を見抜く能力やチェック機能は完ぺきではないからです。いまは正しいと思ったことも時間が経つと間違いだったとされるような事実もよくあります。人間は神様ではないから、歴史を間違いなく見通すことは出来ません。同じ事実でも、人によって見方が違うことがよくあります。同じ海の色が人によって緑色に見えたり、青色に見えたり、水色に見えたりするようにです。それに記事を書く人の思い違い、ミス、知識不足、取材不足、認識不足など。現代は情報化時代と言われます。余りに情報があふれすぎて、一人の人間が十分に理解したり、チェックすることが不可能になったことも、ミスや誤報を生む大きな原因だと思います。それでもマスコミ（新聞も）はニュースを提供するのが社会的な仕事です。誤報を恐れているのは、必要な情報も提供できないでしょう。私は次のように思っています。

誤報は出来るだけ生じないように努力するのはもちろんだが、避けようがないことも事実。一番避けなければならないのは、社会や人に被害、損害、迷惑を与えるような誤報です。第二に、誤報が起きたら速やかに訂正すること。第三に、同じケースの誤報は繰り返さないこと。新聞やテレビは、雑誌や週刊誌、学術論文とは違って、毎日毎日ニュースを提供できる利点があります。きのう間違っただけを、きょうは正すことが出来る、きょう不十分、不正確なことを、あすはもう少し十分に、もう少し正確に出来ること、これが利点です。私はこれを新聞の「訂正機能」と呼んでいます。必ずしも訂正・おわびの記事を出すことはありません。毎日続けて報道することによって、より真実に近づくという意味です。これが「誤報」という弱点に対する新聞の最大の武器だと思っています。

⑨ 記事をのせなかったために、読者からの反響や意見は来ませんでした。ただし、社内では次のような話をしました。「ケガの巧妙というべきか、たまたま虚報だったから掲載しなかったのが正解ということになった。しかし、それは結果論。もしあの記事が事実だとしたら、あんな面白い話を落とした（掲載しなかった）責任は、始末書ものだ」。

中国新聞社 編集局編集委員